

学びの源泉 三谷 宏治

第4号 歴史が教える「事を成す力」(後編)

「法隆寺とは怨霊を鎮めるための寺」

高校の頃、衝撃を受けた歴史書がある。梅原^{うめはらたけし}猛氏の『隠された十字架』だ。

梅原考古学とも称される新しい日本古代史研究の金字塔の一つだろう。1972年に書かれたこの書は世に大きなインパクトをもたらした。

法隆寺が聖徳太子創建による寺社であることはよく知られている。今でも最古の木造建築物として、年間70万人の観光客(うち8割は修学旅行生?)を惹きつけ、夢殿^{ゆめどの}(聖徳太子を祀った八角形の建物)を初めとした多くの国宝を擁している。

では聖徳太子一族自体の流転についてはどの程度知られているだろうか。

太子は時の英雄であり悲劇の人でもあった。次期天皇候補の最右翼でありながら、生涯を皇子として過ごし、その息子、山背大兄皇子の代で一族虐殺の目に遭う。陰の主謀者は藤原氏、舞台は法隆寺だ。

その後、藤原氏を度重なる「不運」「不幸」が襲う。これらを太子の怨霊のせいと感じた藤原氏が、その魂を鎮めるために焼失した法隆寺を再建し、寄進を続けたのだという。

ただの寺社仏閣好きの高校生として、まず私がまず驚いたのは「建立の理由」というものについての梅原氏の拘りだ。

寺の由来にはだいたい「〇〇氏が、△△を祈願して建立」とか書いてある。しかし、考えてみればそんな単純な話であるわけがない。現在のお金にして数百億円を費やす大投資である。それをおいそれと

行うはずがない。

もの凄いの「理由」があるはずだ。それはいったい何なのか。

そして、もう一つの驚き。

それは古代人の「闇」や「怨霊」に対する恐怖心の強さだ。

皆さんは「真の闇」を経験されたことはあるだろうか。目を慣らしても、幾ら眼を見開いても、眼前の掌すら見えない闇の中で、何時間かを過ごしたことがあるだろうか。これは本当に怖い。

照明の不十分な古代においてこういった闇は、身近なものであった。すぐそこに、全てを呑み込む恐怖があったのだ。

怨霊もしかり。人が病で急に死ぬ、海辺や山で行方不明になる。そこになにか理由がないものか。そういう「明確な理由」の一つが怨霊だったのだろう。

人は怨霊の存在を信じ、それが生き死にの理由と信じ、それが鎮まることを、非常に強く願った。

そういった古代人の気持ちになったとき初めて、この大投資の「理由」が分かる。

太子は政権抗争のまっただ中にいた権力者であり、感情を持つ人であった。藤原氏はその崇りをおそれ、それを鎮めるのに必死だったのだ。

梅原氏は結局「後世に作られたイメージでの聖徳太子(聖人君主)」でなく「その時代に生きた厩戸皇子」を「その時代の視点」で見つめよと言っているのだ。

「出雲大社は神様の牢獄」

『神々の流竄^{るざん}』で、彼は言う。

出雲大社は、出雲の神をただ祀るための神社ではない。大和^{やまと}から追放した神を、監禁・幽閉するための牢獄なのだ、と。

確かに出雲大社の造りは極めて特殊である。よく知られているのはその高さ。今でも 24mあるが、古代には倍の 48mあったことが最近の調査で立証されている。世界最大の木造建築、東大寺の大仏殿並みの高さだ。

形はかなり不安定なもので、24mの階段状の台の上に 24mの本殿を置くものだ。更に最古の時代では高さが 96mあったとの伝もある。

それよりも異様なのは本殿の「間取り」だ。

本殿の中を拝むことは一般に出来ないので、直接は確かめにくいだが、基本的に田の字の造りになっている。

普通、寺社仏閣の本殿・本堂の造りは、真ん中に、正面を向いて神・仏像が安置される。当然、正面の柱の数は偶数だ。奇数だと神様の真っ正面に柱が立ってしまう。

それに対し、出雲大社 本殿は正面に 3本の柱が立ち、かつ、神座は右奥に左向きに設置されている。出雲大社に参内する我々は、海の向こうを見つめる、柱の向こうの神様の横顔に、手を合わせているわけだ。

これほど異様な造りは何のためだったのか。「理由」が、あるはずだ。

梅原氏は文献を読み直し、史実を集め、地形を調べ、建物を分析する。そういう総体から建立者たちの「意思」を読み取ろうとする。

行き着いた答えが

「出雲系の神（と言われている神々）はもともと

大和の出」

「大和では昔、各々の神々を信奉する2派の間での権力闘争が起きた」

「これに敗れて1派は出雲に流刑となった」

「出雲大社はその神々の監獄であり、造りも神を逃がさぬ為のもの」

というものだ。

彼は、こういった推論に当たって、決して通説や、官のお墨付きに惑わされない。

例えばそれまでの古代史学者の論拠の最大のものであった「日本書史」こそは彼にとって「権力者の意思の元に改竄^{かいざん}・修正されたもの」であった。

「イエスは投票により神となった」

こういった視点は、ある意味『ダ・ヴィンチ・コード』でも同じだ。著者のダン・ブラウンは主人公に人類最強の書「聖書」について語らせる。

「聖書は人の手によるものだという事だ。神ではなくてね。雲の上から魔法のごとく落ちてきたわけではない」

「新約聖書を編纂するにあたって、八十を超える福音書が検討されたのだが、採用されたのは（中略）マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの各伝だけだった」

「今日の形に聖書をまとめたのは、異教徒のローマ皇帝であったコンスタンティヌス帝だ」「コンスタンティヌスは資金を提供して新たな聖書を編纂するように命じ、イエスの人間らしい側面を描いた福音書を削除させ、神として描いた福音書を潤色させた」

更に著者は「神の子イエス」そのものも、人によって創られたものなのだと主人公に語らせる。

「“神の子” というイエスの地位は、ニケーア

公会議で正式に提案され、投票で決まったものだ」

元々は、神がいて、その伝道者たるイエスがいた。

しかしそれではイエスの立場が弱い、ということで「イエス=神」と正式に決めたのだ。それも会議での投票結果によって。

著者は、イエスの宗教家としての力や価値を軽んじてはいない。ただ、ちゃんと疑いを持ってと言うことだ。

常識は必ずしも正しくない。いや、世の常識こそは権力者によって「作られたもの」かもしれないのだ。

#義経伝説の真実

日本古代史ミステリーでは、高橋克彦氏、井沢元彦氏を忘れてはいけない。

特に、井沢元彦氏の小説は、ほとんど学術論文的である。膨大な文献・史実による裏付けを持って、新しい学説を発表する。(全く新規のものではないにせよ)

それをより多くの人に読んでもらうために、現代の殺人事件と組み合わせた「ミステリー」仕立てになっている。そんな風である。

『義経はここにいる』は^{きだい}稀代の英雄、源義経がどこで死んだのかということテーマにした、歴史ミステリーだ。

源義経の行く末には様々な説がある。

奥州平泉、高館で藤原泰衡に急襲され、弁慶などの家来たちと死んだ、という通説に対し、^{えぞ}蝦夷へとわたったという北行説、更にはなんと樺太、モンゴルへと移り、成吉思汗(チンギス・ハーン)になったという説まである。

井沢元彦氏どう結論づけたのかは、読んでのお楽しみとすることにすが、ここでは本書の中で書かれている「判官^{はっかんひいき}鼻眞」について述べよう。

ご存じの方も多いと思うが、この言葉はそもそも源義経自身を語源とする。

判官の位を得ていた義経に対し、「^{はっこう}薄幸の九郎判官(源)義経に同情し愛惜する意から」といことから来ている。

しかし、何故に日本人は「判官鼻眞」なのであろうか。そしてその判官義経に対して「義経不死説」がこうも根強いのか。

『義経はここにいる』で主人公は言う。

「世の中すべてのことに理由はあるんだよ。判官鼻眞という日本人独特の感情は何故生まれたのか、起源は何なのか、そして義経伝説とどういう関係にあるのか」

「敗者が出れば、怨念というものが発生する。怨念とは、天災、疫病、飢饉 — すべての不幸の根源じゃないか」

故に日本人は敗者を出さないようにする。それが判官鼻眞だと。それが聖徳太子の十七条憲法第一条「和をもって尊しとなす」の本質だと。

更に、言う。

「怨霊が出現しないためには、どうすればいい」

「その人間は死ななかつたと考えるんだ。死ななければ怨霊にはならない、したがって祟りもない。もっとも安上がりで確実な怨霊排除法じゃないか」

これほどまでに「義経不死説」が強い理由がここにある。単なる歴史ロマンではない。その時代に生きた人々の、積極的な不幸回避手段であったのだ。

梅原猛氏は言う。

「一つの寺は、ある意味をもってそこに存在している。その意味を与えたのは、それを造った人間の意思である」

歴史の足跡のすべてに、現代の身の回りの事象たち一つ一つに、意味がある。それを作り上げた人々の意思がある。刮目してそれを見、感じよう。

歴史の本のお話しはこれで一端終えることとする。次回は「マンガ」だ。日本が誇るコンテンツ産業の、存在意義に迫ろう。

お楽しみに。

本リスト

歴史書・小説リスト

- ・ 隠された十字架—法隆寺論、梅原 猛 著、 新
潮文庫
- ・ 神々の流竄(ルザン)、 梅原 猛 著、集英社文庫
- ・ 水底の歌—柿本人麿論 (上)(下)、梅原 猛 著、
新潮文庫
- ・ 猿丸幻視行、井沢元彦 著、講談社文庫
- ・ 義経はここにいる、井沢元彦 著、講談社文庫
- ・ 恨の法廷、井沢元彦 著、徳間文庫
- ・ 写楽殺人事件、高橋克彦 著、講談社文庫
- ・ ダ・ヴィンチ・コード (上)(下)、ダン・ブラウン、
角川書店

初出：CAREERINQ. 2005/04/27